野根山街道物語
岩佐関所編
二十三烈士集結の地
元治元年(1863)、土佐藩に投獄されていた武市半平太の赦免、藩政の勤皇への転換などを求め清岡道之助を中心にした23人が武装集結した。
土佐藩は反乱とみなし800人の討伐隊を野根山へ向け出陣させる。
戦いを避けて阿波へ越境した23人は反勤皇の阿波藩によって土佐へ送還され罪人として野根山街道を安芸郡奉行所へ送られ、いっさいの取り調べもないまま奈半利川原で斬首された。
岩佐からは番頭の木下嘉久次(21歳)木下慎之助(16歳)の兄弟、番卒の川島総次、の3名が参加していた。タレントの劇団ひとり(本名 川島省吾)は川島総次の子孫(来孫)にあたる。また妻兼は中岡慎太郎の姉である。
岩佐関所
土佐三関所のひとつで藩内番所。
江戸時代初期に設置され常に5人の関守が通行人の取り締りなどに勤務していた。岩佐村と呼ばれ、岩佐の清水をかこんで寛保3年(1743)の郷村調では15戸76人が住んでいた。
休憩所のあたりには御殿があり、参勤交代や幕府役人の宿所、休憩、宿泊などにも使われていた。
関所番頭 木下家は豊臣秀吉の家臣で秀吉から木下姓を賜っていた。関ヶ原後山内家預りとなり、岩佐番頭を命じたという。
明治3年 関所廃止となり、住民は野根や佐喜浜に移住していった。
東の方には番役人の屋敷跡が植林の中苔むした石垣だけが残っている。
番所役人は番頭 木下家を筆頭に川島家、久武家、岩崎家、北川家が勤めていた。
岩佐の関所を境に大道南山、野根山大道北山国有林となっている。「大道」とは参勤交代に利用された大道(往還道)をさしている。
桑ノ木の三次さん
桑ノ木に前田三次郎さんという奇人奇行でひょうきん者。
生業は 杣 木挽、野根山街道の保全整備の請負など。
その仕事は際立ち、誰の目をも納得させたという。
岩佐での山神祭の帰り、木から木を伝って一度も地面に下りず家に帰った話や、猿では「朝早く、猿がまだ水を飲む前は捕えやすい」と4、5匹を捕えたことも。
カモシカを「ニク」と呼んでおり、加奈木のつえでシュロ縄の投げ縄で三頭のニクを捕え、ガケから落ちて九死に一生を得た話。イタドリがのびるのを見るため、一昼夜まばたきをせぬように見つめ続けた話など、数々の民話を残している。
しかし、幕末、岩佐の関所の友人三人が土佐勤皇党の二十三士として決起し、処刑された元治元年の夏以降、この人のユーモアに満ちた噺は聞かれなくなったという。
明治27年、生没月日が同じ3月17日 78才の生涯だった。
R493号
四郎ヶ野峠
WC
急坂
至野根→
急坂
花折峠
殿様がかごの中から花を折ることができるほどの急坂だったことに由来する。
清助地蔵
つづら折の坂道
桑ノ木分岐
一の門
茶屋の段
東洋町最高峰
864m
ほとんどが樹林におおわれた20km 木もれ日や梢のざわめきを楽しみながら歩こう。
1832年にお地蔵様が祀られるまでは天然杉が何株もあり千本峠と呼ばれていた。
平坦で気持ちのいい山道
地蔵峠
地蔵杉
五里塚
木立ちのどこかから野根山天狗が覗いているかもしれない。
段ノ谷 天然杉群
岩佐は野根山を南北に越える道が交わる山峠でもある
関主木下家墓所 関門 休けい所など
野根山 983m
大道北山
坂道
岩佐関所跡
大道南山
佐喜浜あたり眺望
鍛冶屋の嬶 お産杉の伝説
450年ほど昔のこと、長宗我部元親が阿波の国を攻めていた時のこと。
家臣の嫁が戦場の夫を気づかい、野根山街道を身重の身体で越えていたところ、装束峠をすぎたあたりから産気づき陣痛に苦しみだした。
ちょうど一人の飛脚が通りかかり、印籠の薬を飲ませるなどして介抱していたが、暗くなり獣の気配が近づきはじめた。
飛脚は女を杉の大木の上に引き上げた時、狼の群れがせまり木をかけ登って襲ってきた。
勇敢な飛脚は刀をふるって狼を次々と仕とめて女を守り、樹上で無事出産をした。
二人を襲った狼の親玉は「佐喜浜の鍛冶屋のカカ」という女の大狼だったというが、後日談ではこの狼は女山賊の頭目であったという。
蛇谷道
熊笹峠
歌碑
展望台 1082m
お茶屋跡
坂道
お産杉
四里塚
土御門上皇が流されていた幡多からの帰途「いわさん」と名付けた。
加奈木の崩え 「日本三大崩壊」
段集落の元は加奈木山の安居(あんご)の池付近にあり木地師や平家の落人が住み着いた所といわれる。
それが1605、1707、1746、1854、1946年と続く南海地震のたびに加奈木山に崩えが発生している。
昔々、娘の姿をした大蛇の化身があらわれて「天と地がひっくり返る大変事が起こる。ここは山津波で池の底となる。できるだけ遠い場所へ移った方が良いぞ」とお告げをした。
娘が去って数年後、大崩壊が発生し、壊滅した。
村人は娘(姉妹)を神様として崇め祀り、祠を建て祀り感謝を忘れなかったという。
土御門上皇の歌碑
承久の乱により鎌倉幕府より土佐へ流罪となった土御門上皇が通っている。
うき世には かかれとてこそ 生まれけめ ことわり知らぬ わが涙かな
木下由里さんの哀話
佐喜浜の庄屋 寺田家に嫁いだお由里さんは、大変可愛らしく奉公人も大事にする、きれいで心の優しい人だった。一年あまりの新婚生活もつかの間、産後の無理がたたったか、姑にひどくいびられたかで、産まれたばかりの赤子をおいて、泣く泣く岩佐の実家に帰らされ、愛児を慕いながら短い一生を終えた。(文政四年)(1821)。
恋しい乳飲み子を思いつづけ、霊となって夜ごと佐喜浜に通って乳を飲ませていたという。
木下家墓所に眠るお由里さんのお墓には、子を想う母親の愛情がいっぱいこもっている。
自然遊歩道 四国のみち
廃道寸前となっていた街道は昭和57、58年に全コース整備され「四国のみち」自然遊歩道としてよみがえった。
東洋町〜奈半利町間の室戸岬回りの道は国道となり、野根山連山を通る道が幹線の「大道筋」であったため、歴史的に価値ある道として四国のみちとなった。
野根山大名行列といわれる大名行列は、土佐藩四百人、夫役二千人程という大行列であり、お茶場の整備や送り役などの出役がかかり、郷の村々にとっては迷惑であったと伝えられている。
お茶屋場の整備は庶民にとっては大きな負担だった
五代のつえ
別役川の大崩壊で天保11年(1840)には四十町四方にわたって崩れて野根山街道もこのため何度もルート変更されている。
古道は一の門より右斜面を下り別役川上流に出ていた。(古道 五代線)
野根の中村に清助さんという貧しい百姓の夢枕に弘法大師が立って以降大師信仰に目覚め ギガ(杉の根の芯)で地蔵を彫り、街道筋の鎌坂に安置した。
霊験あらたかであったが木仏であった為、今はもう知る人もいない。
街道にあるいくつかの御茶屋の段は大名行列などが休憩するところで数百人が一度に休める広場になっていた。
街道や茶屋の段の整備には周辺の百姓がかり出され、またかごかき、荷はこび、書状送りなども百姓の夫役でまかなわれていた。
参考・引用文献
○四国のみち 野根山街道パンフ
○野根山街道散策ガイドマップ
○室戸市の民話 伝説
○高知の森林
○土佐の峠風土記
装束山 1.2 加奈木の崩 1.2 岩佐関所 2.3 地蔵峠 1.3 五里塚 1.4 一の門 3.8 四郎ヶ野峠